

質問発話を分割して提示する利点について

川端 良子[†], 松香 敏彦[‡]

Yoshiko Kawabata

[†] 国立国語研究所, [‡] 千葉大学

National Institute for Japanese Language and Linguistics, Chiba University

kawabata@ninjal.ac.jp

1. はじめに

会話の中で特定の対象が参照される時, 話し手が意図した対象と同じ対象を聞き手が想定していることは, 会話によるコミュニケーションが成立するための重要な課題の一つである。この参照対象の相互認識を対話参加者がどのように達成するかということについて複数の方略が報告されている [1],[2]。その一つに, 発話の途中にポーズを入れ, 発話の途中で聞き手の参照対象についての理解状況を共有する方法がある。(1) に日本語地図課題対話 [3] における例を示す。

(1)

- 1 G 銀の鉱山がすぐ下に {0.8}
- 2 F ある。
- 3 G あるでしょう?。
- 4 F うん。
- 5 G そこを そこうちよっと迂回す 迂回するように {1.0} ちよい左に出ながら下に行って
(マップタスク:j2n4)

上記 (1) は, 「銀鉱」(会話では「銀の鉱山」という表現が用いられている) という地図上のランドマークが会話に導入される箇所の発話を転記したものである¹。1行目と3行目の Giver の発話は全体として確認という一つの行為と捉えられる。ただし, 間に 0.8 秒のポーズがあり, そこで Follower が「ある」と発話を行っているため, Giver は発話が言い終わる前に Follower の地図上にも銀鉱が存在することが両者の間で既知となっている。

Clark and Wilkers-Gibbs[2] は, このように間にポーズを入れて, 発話を分割して特定の対象を参照することを 'Installment noun phrase' と呼んでいる。そして 'Installment noun phrase' を含む会話参加者のやりとりは, 参照の開始から完了までの会話における共同の-effort を最小化すると述べている。彼らは, 分割が生じる理由として, 計画している名詞句が複雑すぎて聞き手が理解しづらいことを挙げている。し

かし, この説明は, 地図課題対話については当てはまらない。なぜなら, 地図課題対話で主に参照されるランドマークは全て短い名称があらかじめ記載されており, 複雑ではないからである。では, 地図課題対話のランドマークを参照する際, 発話にポーズを入れるのはどのような目的によるものなのだろうか。本研究は, この要因について検討する。以降では, 名詞句の途中に限らず, ポーズを入れながら発話を行うことを「分割提示」と呼び, 分割提示がどのような共同の-effort に関わるのか分析する。

2. 仮説

地図課題対話を観察すると, 聞き手が参照対象を知っているかどうか確認するやりとりは, 一つのランドマークに対して複数回行われることがある。(2) にその一例を示す。

(2)

- 1 F 製鉄所の右手には大きな松の木があります?。
- 2 G あ。はいはいはいはい。
- 3 F ありますね。はい。
- 4 G はいはい。

(マップタスク:j1n4)

(2) の1行目で Follower は「大きな松の木」というランドマークを会話に導入し, 2行目で Giver が肯定的応答をしている。そしてさらにその後, Follower による確認, Giver による応答というやりとりが行なわれている。これを図示すると以下ようになる (A と B は異なる話者を示す)。

① A:質問 - ② B:肯定応答 - ③ A:確認 - ④ B:肯定応答

これに対し, 前節に挙げた (1) では, 聞き手である Follower が2行目と4行目で2回肯定的応答を行ってはいないものの, Giver は上記③の確認を行わずに次の話題を提示している。このように発話の途中でポーズを入れ, 分割提示を行うことで, 話し手による確認のプロセスを減らしているのではないだろうか。

3. 方法

地図課題対話に収録されている 128 対話中のうち, 相手の顔を見ることができない, 非視認条件下で収録

¹一番左の列は会話断片内での連番, 2列目は発話者の識別子 (G:Giver/F:Follower), 3列目が転記テキスト, {} 内の数字は発話途中の無音区間 (単位:秒), 末尾の句点「。」は発話の末尾であることを示し, 「?」記号は直前が上昇調で発話されていることを示している (以降の事例でも同様)。

された 68 対話を用いた。68 対話それぞれの会話の中で、各ランドマークが最初に導入された箇所を分析対象とした。手順は、次のとおりである。まず、各ランドマークが会話の中で最初に言及された箇所を抽出した。次に、抽出したランドマークを含む発話に対して、発話機能の分類を行った。地図課題対話において、ランドマークは多様な発話の中で言及される [4]。本研究では最も使用頻度が高い形式である「存在確認」を分析対象とした。「存在確認」とは、対話の相手にランドマークの有無について情報を要求する発話のことである。

分析対象の発話に対して、分割提示の有無を判断した。同一の節内で、ランドマークより後に明確な休止がある場合に分割提示ありとした。休止の長さはおよそ 0.3 秒以上の場合とするが、話し手の話速からあきらかに休止を入れているととらえられる場合は、それ以下の長さの休止でも分割提示ありとした。さらに、ランドマークの導入の後に、ランドマークを導入した人と同じ人物が再び同じランドマークの有無について質問、もしくは確認を行っているか否かを調べた。

4. 結果

表 1 は、ランドマークが最初に会話に導入される際、分割提示を伴っているか、また (2) のように質問と確認が 2 回以上行われるか否かについて集計したものである。1 列目のランドマーク共有 (あり/なし) とは、地図課題対話における、ランドマークの種類を示している。「あり」とは Giver と Follower の両者の地図に存在するランドマークで、「なし」は一方の地図にしか存在しないランドマークである。括弧内の数値はランドマーク条件と分割提示の有無の 2 × 2 の 4 象限内における各頻度の比を示している。

表 1 分割提示の有無と聞き手の途中応答の種類

| ランドマーク共有 | 確認回数 | 分割提示 | |
|----------|------|------------|-----------|
| | | なし (%) | あり (%) |
| あり | 1 回 | 193 (75.1) | 45 (91.8) |
| | 複数 | 39 (15.2) | 2 (4.1) |
| | その他 | 25 (9.7) | 2 (4.1) |
| | 小計 | 257 (100) | 49 (100) |
| なし | 1 回 | 45 (36.9) | 12 (52.2) |
| | 複数 | 64 (52.5) | 8 (34.8) |
| | その他 | 13 (10.7) | 3 (13.0) |
| | 小計 | 122 (100) | 23 (100) |

分割提示の頻度は全体で 16%(72/451) 程であった。

表 1 から分かるように、共有あり条件、共有なし条件共に、分割提示を行うことで、確認の回数が少なくなっていた。さらに、ランドマークの共有条件によって存在確認の頻度に差が見られた。共有あり条件よりも、共有なし条件のほうが確認回数が多かった。

5. 考察

上記の結果は、分割提示をすることで、確認のステップを省略できる可能性を示している。しかし、そもそもなぜ、論理的は明らかな事について複数回確認を行うのだろうか。特定のランドマークの存在について質問を行い、それに対して肯定、もしくは否定の応答が得られた場合、その応答が肯定/否定のどちらであったとしても、その 1 回のやりとりだけでランドマークの有無についての知識は得られるはずである。そして、やりとりは少ない方が、コストが少ないように思われる。

確認が複数回行なわれるということは、同じように見えても実は、1 回目と 2 回目の発話の役割が異なると考えられる。(2) の対話断片において、話し手 (ここでは Follower) は、1 行目の発話の時点では、相手の地図に「大きな松の木」があるか不確かであるが、3 行目では、存在することを想定している。つまり、話し手は自分が「想定していること」を相手から肯定されるというプロセスを必要とするのではないだろうか。つまり、分割提示を行うことで、発話の途中で、相手の参照対象についての知識を獲得することで、1 回目のやりとりを省略しているのではないかと考えられる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K13196 の助成を受けたものです。

文献

- [1] Sacks, Harvey and Schegloff, Emanuel A.(1979), "Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction", *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, pp. 15-21
- [2] Clark, H. H. and Wilkers-Gibbs, D.(1986),"Referring as a collaborative process", *Cognition*, Vol. 22, No. 22, pp.1-39
- [3] 堀内靖雄, 中野有紀子, 小磯花絵, 石崎雅人, 鈴木浩之, 岡田美智男, 仲真紀子, 土屋俊, 市川薫, (1999), "日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴", *人工知能学会誌*, Vol. 14, No. 2, pp. 261-272
- [4] 川端良子,(2019) "地図課題対話における参照導入方法の特徴", *言語資源活用ワークショップ発表論文集*, 国立国語研究所